

はじめに

西川長夫

戦後60年を経て、「戦後」がようやく歴史学の対象となり、さまざまな領域における戦後研究が始められている。他方、保守的な政権の側から「戦後レジーム再編」のスローガンの下に、教育基本法の改正、さらには憲法の改正等を含む戦前回帰の政策が出されている。これに対して戦後研究がまっとうな対応をしているとは思えない。本研究は戦後の主要問題でありながらも見落とされ忘れられようとしている農民運動と農村の変容に焦点を当て、戦後論の新しい視座をさぐる試みである。

戦後農民運動のなかで最も注目された茨城・常東農民運動の中心的人物の一人であり、『戦後農民運動史』（大月書店、1954）の著者であると同時に、農村と農民運動を舞台にした大河小説『三つ目のアマンジャク』の作者でもある松下清雄（1929 - 2006）の生涯を中心に戦後の農民運動と農村・農業の変容の跡をたどり、忘れられた「戦後」の再構築とその可能性を検証することによって、戦後研究に新しい視座を提供したい。

戦後の社会構造の変化と政治的イデオロギー的な理由によって忘れ去られようとしている戦後農民運動の莫大な資料と証言の収集、分析・整理を行い、戦後史に新たな照明を当てる。とりわけ当時に農民運動に参加していた農民や活動家はすでに70歳代後半から80代になり、この数年が重要な証言を集める最後の機会となるであろう。後続の研究者が利用できるような資料を残しておきたい。

戦後農民運動は関係者の高齢化に伴い、資料や証言の収集が急がれるので、私たち共通の関心をもつ研究者たちはすでに数回の会合をもち、それぞれに作業を始めている。この6月3日と4日には東京都町田市を訪れた。3日にはかつての農民運動の仲間たちに呼びかけ、「松下清雄を語る会」が開かれ、松下氏の遺族や大金久展、いいだもも氏ほか10名あまりが参加、それぞれの思い出を聞くことができた。また4日には町田市の松下宅を訪れ、松下静枝夫人や実弟の松下忠夫氏の話聞き、書齋に残されている莫大な資料や未発表原稿を見せていただいた。夫人の御好意でこれらの資料は今後、私たちの自由な閲覧が許されることになっており、すでに西川の手元にはノート9冊と、未発表原稿数千枚のコピーがとどいている。可能な限り多くの資料を収集し、それらを分類・整理し、他の研究者たちにも使えるようにすることが私たちの最初の仕事となる。また私たちは松下清雄関係の研究から始めるが、これは次第に拡大していった戦後農民運動の全体、あるいは戦前の農民運動との関連に及ぶはずである。とりあえずはこの領域における戦後史の空白を埋める作業が中心になる。

社会運動史はこれまで一般にその形成期や最盛期を語ることに主眼が置かれてきたが、私たちの場合は農民運動と農村共同体の解体期にも注目し、その過程を精密にたどることによって、現在の農村―農業の変容というグローバルな問題につなげたい。松下清雄氏はその生涯の後半

を町田の団地の一室にこもって執筆に専念したが、残された草稿を運動の解体期の問題としていかに読み解くかがこの研究の重点の一つになる。

以上は2007年度学内提案公募型研究推進プログラム基盤的研究調査に記された、本研究の目的と研究計画に関する文面であるが、特に訂正すべき部分も見当たらないのでそのまま引用させていただいた。上記の文章にも記されているように、この研究会の主要な目的の一つは、戦後農民運動のすでに失われかけている資料や証言を収集し、われわれの考察の対象を明確にすることであるが、後続の研究者にもこれらの資料を利用してもらいたいという強い願いをもっている。その目的にかなうような形で、今後もひき続き報告書を出していきたいと思う。

今回の第一回報告書は松下清雄氏の年譜と伝記的な資料を中心に編むことを考え、松下清雄氏の最も良き理解者であり長年生活を共にしてこられた実弟の松下忠夫氏と松下清雄氏夫人の静枝氏に年譜の製作と回想記の執筆をお願いした。私たちの願いに快く応えてこのような立派な年譜と素晴らしい文章をお送りいただいたお二人に心からの感謝の気持ちを記させていただきたい。松下忠夫氏の手になる「松下清雄年譜」は、貴重な回想記とともに今後の私たちの研究の基礎になるものである。松下静枝氏による「日記」にもとづく「年譜」と「回想」は、とりわけ『三つ目のアマンジャク』執筆期を中心に、他の誰も知ることのできない執筆と闘病生活の苦しく感動的な日々を私たちに伝えてくれる貴重な証言である。(次号にはいいだも氏の文章をはじめ農民運動の同志や友人たちの回想記を掲載させていただく予定である。)なお「年譜」の他に、お二人の御好意によって今回は二葉の写真に掲載させていただいた。一つは松下清雄氏の少年時代の長岡における家族写真、もう一つは松下清雄－小林静枝お二人の結婚披露パーティーの記念写真であるが、歴史的にも貴重な写真だと思う。

松下清雄氏は数多くの小説作品やルポルタージュを残しているが、自伝的な文章をあまり書かない人であった。今回はほとんど唯一の例外として、西川長夫に宛てた長文の手紙を掲載させていただくことにした。このような私信を公表することに躊躇がなかったわけではないが、松下忠夫氏と松下静枝氏の許しをえて掲載に踏み切った。

今回の報告書に収められた安岡健一氏の力作論文「同時代の運動史を書くということ－渡辺武夫（松下清雄）『戦後農民運動史』（1959年、大月書店）を読む」は、1月26日に行われた研究会の報告をもとに執筆されている。研究会はその後4月1日にも行われ、野田公夫氏による栗原百寿理論と戦後農民運動のかかわりにかんする報告と伊藤淳史氏による松下清雄と常東農民運動にかんする資料調査の報告が行われた。こうした理論上の問題や調査資料なども順次報告書に載せてゆきたいと思うのでご協力をお願いしたい。